

Title	定量的調査と定性的調査の基礎(第4回) 定性的調査 (面接法、観察法)による評価
Author(s)	杉原, 太郎
Citation	ヒューマンインタフェース学会誌, 15(1): 31-42
Issue Date	2013
Type	Journal Article
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/11348
Rights	ここに掲載した著作物の利用に関する注意：本著作物の著作権は特定非営利活動法人ヒューマンインタフェース学会に帰属します。本著作物は著作権者であるヒューマンインタフェース学会の許可のもとに掲載するものです。 Copyright © 2013 ヒューマンインタフェース学会. 杉原太郎, ヒューマンインタフェース学会誌, 15(1), 2013, 31-42.
Description	

基礎講座

「定量的調査と定性的調査の基礎」 第4回

定性的調査(面接法、観察法)による評価

北陸先端科学技術大学院大学 杉原 太郎

1. はじめに

本シリーズは、HI 研究の評価において、最も基礎となる考え方についての稿である。初回は、初学者のためのリサーチデザインの導入として、実験・定量的調査・定性的調査(質的調査とも言う)の考え方、基本的なプロセスを、第2回目は定量的・定性的調査の特性、そのプロセス、各々で得られるデータの特性を、第3回は定量的調査および心理学的実験を概観した。本稿は、4回シリーズの最終回として、定性的調査の思想的基盤を説明した後に、調査的面接法と観察法を取り上げる。

HI 研究では、人とのインタラクションを志向した技術開発を目指すため、人を対象にした評価を行うことが求められる。しかし、新しい技術をユーザがどのように用いるのかが、開発時にはっきりしない場合も珍しくない。特殊な状況下や、実際の現場の中での技術適用範囲を模索することもある。障害者を対象とした研究では、テイラーメイド的な技術開発になる場合もある。多様な形態の情報機器と人とのインタラクションが研究の主対象であることは、両者の関係性がダイナミックに変化する問題を扱うことを意味する。このように様々な事情で、HI 分野の研究は数値でユーザあるいは技術の特性を表現する事が難しい、あるいは数値表現が不適切な場合に採用される方法が、定性的な手法である。本稿では、この手法について概説する。

初回でも述べたが、筆者は、工学系出身でありながら、社会科学の研究に関わることになった経験を有する。その経験を生かし、特に工学系研究者が陥りやすい落とし穴について概説することに重点を置く。内容は、HI2010 および HI2011 の講習会で説明したものをベースにした。本稿の想定読者層は、学部生や大学院から専門を変更して新たに HI 分野の研究に取り組もうとする人々である。評価のためのリサーチデザインの導入であるので、各種手法や分析の詳細には踏み込まない。また、生理計測や認知神経科学的計測は対象としない。評価の枠組みを固め、計画を立てるためには文献レビュー(literature review)も重要となるが、これについても紙幅の都合で割愛する。

2. 定性的調査の思想的基盤

実証主義と社会構成主義の立場の違いについてまとめたものが表1である。前回も述べた通り、実証主義は、因果関係的な説明をすることを研究の目的に置き、仮説検証的な方法が主となる。

他方、社会構成主義(social constructionism)とは、人びとの自己や世界に対する理解のあり方が社会構造や文化によって意味付けられた体系に影響されると考える立場で

表1 実証主義と社会構成主義^[1]

	実証主義	社会構成主義
観察者	対象から独立した存在でなければならない	観察がなされているものの一部分である
説明様式	因果関係を実証しなければならない	対象となる人や事象などに対する一般的な理解を深めることを目指す
研究の進展過程	仮説と演繹	概念が導出されることから密なデータを集める
概念	測定可能なように操作可能にされる必要がある	利害関係者の視点を組み込むべきである
分析単位	簡単に言い換えられるべき	「全体の」状況の複雑性を含みうる
一般化の方法	統計的蓋然性	理論的抽象化
サンプリングの要件	ランダムに選ばれた大量のサンプル	目的的に選ばれた少数の事例

ある^[1,4]。質的調査の前提となる考え方である。「日常(現実)世界(reality)は、人びとがその社会的世界と相互作用することによって構築されている(p.110)」^[10]という説明がわかりやすい。調べようとする現象が、人々にとってどのような意味・意義を持つのかを明らかにしたい場合に適用される。

社会構成主義と似た考えの流派もある。Gargen の分類を引用すると、

- ・社会-心理構成主義(social constructivism): 個人の心(内界)が外界との関係のなかで現実を構成するが、その心的プロセスは、とりわけ「社会的な」関係からの影響を強く受けているとする考え方
- ・社会構成主義(social constructionism): 「自己」や「世界」を分節する媒体としての「対話」と、対話が社会的な関係の中で果たしている機能を、何よりも強調する考え方。
- ・社会学的構成主義(sociological constructionism): 人々の「自己」や「世界」に関する理解のあり方が、「権力」や「社会構造」によって以下に影響を受けるかを重視する考え方。(pp.89-90)

となる。本稿では2番目を対象とする。

3. 代表的な方法

本稿では、定性的調査の代表的なものとして、事例研究(case study)、エスノグラフィ(ethnography)、グランデッドセオリー(grounded theory)を取り上げる。エスノメソドロジー(ethnomethodology)も重要な考え方であるが、HI 関係の学会で発表される機会が少ないことと、本学会誌においてエスノメソドロジー特集が組まれている^[17, 22-24, 33]

ことから、本稿では割愛する。興味のある方は、特集記事を参考にされたい^{*1}。

3.1 事例研究

事例研究とは、個別の事例に関する全体論的かつ詳細な報告と考察のことである^[3, 10]。単一あるいは少数の現象や実体を丹念に調べることで、特徴的かつ重要な諸要素間のインタラクションを明らかにしようとするものである^[10]。事例の特殊性・個別性に焦点を当てた個性記述を目指すものと、個性記述を通して、新しいアイデアの抽出、仮説生成、モデル構築などを行い、一般化を目指すものの2種類の目的がある^[26]。HI分野の研究でも非常にメジャーな方法であり、トップ会議であるACM CHIには独立した投稿カテゴリとして用意されている。

長所は、特定の状況や出来事やプログラムや現象に焦点を当てており、対象の数を絞り込むことで明らかにしたい事柄について多くの項目を取り上げ、深く調べることができることである。結果として得られるものは、研究対象に関する豊かな記述であり、研究対象への読者の理解を促すものである。個別の要素のインタラクションを全体論の中で位置づけ、対象がもつみずみずしさを状況から切り離すことなく提示することができる。その結果、読者に新しい発見をさせたり、経験を広げたり、すでに分かっていることを確認させてくれたりする^[9, 10, 26]。

短所は、費用と時間がかかることが真っ先に挙げられる。また、詳細に記述・考察を行うには、調査法の技法の訓練、あるいは文献分析の訓練が必要とされる。単一あるいは少数の事例から得られた結果を、定量的調査や実験と考え方・手法で一般化することはできない。一般化可能性（外部妥当性）は、読者が研究結果とそれから学び取ろうとするもののとの関連から芽生える。さらに、記述が長くなるために、読み手にも十分なりソースが要求される^[9, 10]。

冒頭でも述べたように、HI研究では、実世界の制限からどうしても単一の事例しか調べられないこともある。Yingは、以下に示した6条件であれば単一事例研究（single-case design）でも良いとした^[16]。

1. 十分に定式化された理論の追試のための決定的事例(the critical case in testing a well-formulated theory) 理論を検証したり、問題点を指摘したり、あるいは拡張したりするために実施される事例である。
2. 極端あるいは類まれな事例(an extreme case or a unique case) 対象とする現象が極めて稀にしか起こらないような事例の場合、単一事例で調査・分析を行う価値がある。
3. 代表的あるいは典型的な事例(the representative or typical case) 毎日の、あるいはありふれた状況における対象の状態や対象が取り巻かれた環境を把握することが目的となる。平均的な事例(average case)と表現されることもある。
4. 天啓的な事例(the revelatory case) 研究を行う前には調べられていなかった現象が偶発的に発生し、それを調査・分析する場合にも単一事例の利用が正当化される。

5. 長期にわたり調査する事例(the longitudinal case) 調査期間内に同一事例を長期間調べ、別の複数の側面から研究する場合も単一事例で構わない。
6. 試験的に実施した事例(the pilot case) 仮説検証型研究や複数ケース・スタディを実施する準備として実施する事例研究も単一で許される。ただし、Yingの分類では補記的な存在である。パイロットケースは、これ自体が完結した研究とは見なせない。

3.2 エスノグラフィ

エスノグラフィには、大きく2つの意味があるとされる。「調査対象をフィールドワークし、その場の人々が持つ社会的秩序と意味を明らかにする手法」と「その成果として書かれた報告書(民族誌)」である^[10, 20]。フィールドワークの中では参与観察が中心的であるが、個人深層面接法、文献調査、日誌法なども併用される^[10]。元々は文化人類学者が異国で一定期間現地の人々と寝食を共にし、その場の人々が持つ社会的ルールなどを明らかにするために行ってきたものであるが、近年は研究室活動の調査などにも適用されている。HI分野も比較的新しい適用領域の1つである。

参与観察をはじめとした、非構成的な観察の説明の多くがオーバーラップするので、紙幅の都合もありここでは詳細に説明しない。

3.3 グランデッドセオリー

グランデッドセオリー(グランデッドセオリーアプローチ)は、GlaserとStraussにより発案され、普及した独自の調査分析法である^[6]。データに根ざした(grounded on data)理論化に特徴を持つ、発見的・帰納的な手法である^[10, 31, 35]。理論の有効性が特定の領域に限られた場合を領域密着理論(substantive theory)、適用領域が拡大された場合を公式理論(formal theory)と呼ぶ^[3, 6]。

この手法の特徴は、継続的比較法と理論的サンプリングの考え方を上手にミックスし、理論を生成する方法を編み出した点であろう。理論的サンプリングについては4.3にて後述するので、ここでは継続的比較法について述べる。グランデッドセオリーにおける継続的比較法は、以下のような過程を経る^[6, 10, 31, 35]。

まず、書き起こし文やフィールドノート(後述)などを通して読み込んだ後、データの脱文脈化を行う。続いて、データを比較し、共通した特性を有するデータ同士をまとめて暫定的な命名をする、すなわちコーディングする。この時のカテゴリーの抽象度はまだ高くない。この過程で浮かんできた洞察やアイデアをメモに残す。その後、データとカテゴリーを比較しながら、カテゴリーの抽象度を高めていく。それが終われば、共通性を持つカテゴリー同士を統合

^{*1} 2012年12月9日現在、ACM Digital Libraryを用いると、case studyで検索された論文数は29,769、ethnographyは1,884で、grounded theoryが1,237、action researchは780、phenomenologicalは657、ethnomethodologyは361という結果である。

したり、サブカテゴリーを生成したりして、さらに抽象度を高めていく。これらの過程では、説明に不足がないか、反証できるカテゴリーはないかなどの検討も同時に行われる。理論的飽和に至った、つまりデータを新たに収集しても分析してもカテゴリーに変化が見られなくなった段階で、データ収集と分析は終了する。

この手法を用いて学会発表した場合、他の調査者が行なっても同一の結果になるのかという批判を受けることがある。おそらく、全く同じ結果になることはないであろう。しかし、妥当性の判断は、生成した理論全体から下されるべきであり、どの程度データに支えられているかで行われるべきとされる^[10, 31, 35]。

4. 定性的調査のキーポイント

4.1 密な記述・雑な記述

結果の妥当性・信頼性^{*2}を高めるためには、密な記述(thick description)が必要とされる^[10, 20, 21]。密な記述とは人類学者 Geertz による、調査に対する記述は文脈を含めて丁寧に記述する考え方である^[3, 5, 21]。定性的調査では、研究者個人の意味世界が調査対象者たちの意味世界、すなわち「現場の言葉」と研究者コミュニティの意味世界、「理論の言葉」の架け橋として機能する。密な記述は、図1に示したように、両岸を何度も往復することで意味の解釈の質が高まったものである。研究者は、両者の言葉を的確に翻訳できる「バイリンガル」のような存在となり、深みと広さを有し、理論的にもリアリティの上でも妥当かつ信頼のできる論文を産出できる^[21]。

佐藤^[21]は、雑な記述について8つの典型例を挙げている^{*3}。

読書感想文型

図2に示したように、個人の意味世界の比重が大きく、書き手の主観的な解釈や個人的な判断に基づいて書かれた、自己完結型の論文である。1種類の二次的データを用いて書かれるものに、多く見られるとされる。

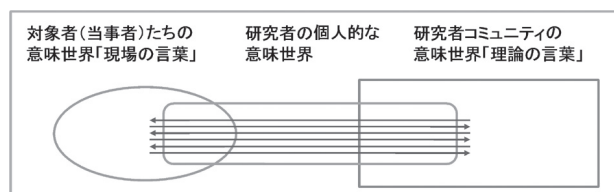


図1 密な記述^[21]

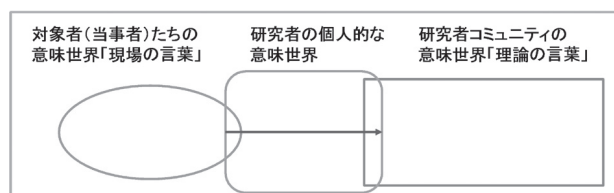


図2 雑な記述(読書感想文型)^[21]

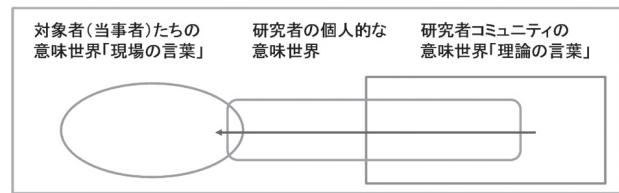


図3 雑な記述(ご都合主義的引用型・キーワード偏重型(天下り型)・要因関連図型)^[21]

ご都合主義的引用型

研究者の都合の良いデータのみを用いて書かれた論文や著作である。実際には密に書くことができるデータを有していても、紙幅制限の都合で止むを得ずご都合主義的に見えるものになってしまう場合と、雑かつ恣意的に引用した場合とがある。引用したデータの妥当性を示すためにも、調査対象者や実施者の基本的情報は論文に盛り込んでおかなければならない。

このご都合主義的引用型と、続く2つのタイプは、図3に示したように研究者コミュニティの「理論の言葉」が記述・解釈を行う際に強く影響し、「現場の言葉」が持つ本来の意味を読み解くことが疎かになる。

キーワード偏重型(天下り型)

発見事項や主張を一言で言い表せるように見えるキーワード(用語あるいは概念)を提示したり、現象に適用したりする論文である。データ(現場の言葉)と概念(理論の言葉)の往復が不足しており、平板な記述・解釈となる。天下り型は、著名な研究者や仲間などの研究で提唱された概念を、空から降ってきた恵みのように適用するものである。まるでその一言で全てが説明できるマジックワードのような存在になっている場合もある。

要因関連図型

十分な根拠やデータに基づかずに、要因や現象で図形・色で表現し、それらを矢印で結んでモデル図のように示すことも、雑な記述の1つとされる。要因関連図そのものは、書き手にとっては論点の整理になり、読み手にとっては理解の助けになるものであるため、非常に役立つものである。しかし、何に基づいて描かれたのかが分からない図は、混乱を招くだけである。また、図のみを示して十分に説明しない場合も、同様である。

ディテール偏重型

これまでの3つとは反対に、図4に示した通り現場の言葉を重要視しすぎるあまり、抽象化が不十分となり、学問の「理論の言葉」として強度が足りなくなる場合もある。

*2 定性的研究においては、信頼性の用語を当てはめることが適切ではないという議論があることは第2回で述べた。しかし、ここでは整合性のためにあえてこの用語を用いる。

*3 文献では7つであるが、図との整合性を取るためにキーワード偏重型の天下り型とたたき上げ型を分けることにした。

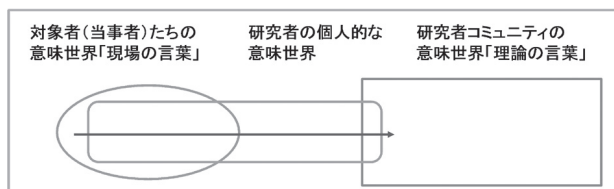


図4 雑な記述（ディテール偏重型・引用過多型・キーワード偏重型（たたき上げ型））^[21]

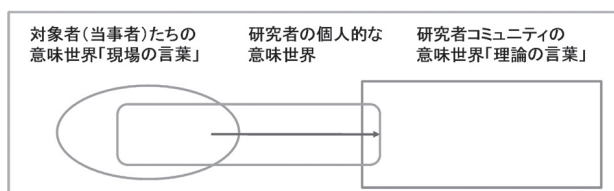


図5 雑な記述（自己主張型）^[21]

ディテール偏重型はその1つである。細部の説明は十分になされており、その記述に不足はないが、研究全体を貫くストーリー、あるいは説明図式がないために個別事象の報告の連なりにとどまるタイプの論文である。一般的な理論や似たテーマを扱った先行研究との関係が明らかにされていないことに起因する場合がある。

引用過多型

文字通り研究参加者^{*4}の発言などを、必要以上に引用してしまうタイプである。ディテール偏重型と同様にデータや記述の量は十分であるが、前後関係や理論との関係の説明を省いた上で発言を最初から最後まで引いてしまうなどの行為から生じる。記述やデータは分厚いが、論文そのものは雑というタイプである。

キーワード偏重型（たたき上げ型）

基本的な特性は、天下り型と同じである。異なる点は、誰かの言葉を借りてくるのではなく、分析の中からのたたき上げ式に生み出す部分である。

自己主張型

著者自身の経験やそれに対する思い入れが強く、データ収集も十分ではなく、分析も浅いま狭い範囲での結論を一般化した雑な記述が、図5に示した自己主張型である。個別のエピソードには興味深い点が含まれていることも少なくないものの、個人的な意味世界の中で完結してしまっていると言われる。

4.2 コーディング・カテゴリ化・概念化

定量的コーディングと定性的コーディングの相違点を表2に示した^[4, 21]。定量的コーディングは、データの要約や圧縮が目的とされ、通常、調査中に行われるのは1度だけである。質問紙回答時あるいは実験時に獲得したデータは、数値に置き換えられる。このとき方法は、先行研究や事前

表2 コーディングの考え方の違い（[14], [21]を一部改変）

	定量的コーディング	定性的コーディング
調査プロセスの中での位置づけ	通常は、データ収集とデータ分析の間に1回だけ実施される	調査全体にわたって何度となく繰り返し行われる
概念的カテゴリとの関係	事前に決められたカテゴリをデータに対して当てはめていく	データ分析の作業を通じて概念的カテゴリそのものを構築していく
元のデータとの関係	適用されるコードは元のデータを代替あるいは要約したものとなる	元データのコピーまたはポインタを保持するので、いつでも元データを参照できる
調査の最中に概念的カテゴリのコードラベルを変更する可能性	通常は、予備調査の後に新しいカテゴリが追加されることは一切ない	調査の最終段階になるまで、新しい概念的カテゴリは作られる可能性がある
既存のカテゴリを作り直す可能性	より単純な概念化を行うために複数のコードをまとめて少数のコードにすることがある	コーディングされた資料にコード追加したり、下位次元のコードを構築することがある。複数の概念的カテゴリは、共通の意味が見出された時に1つにまとめられる
チームによる調査プロセスとの関連	コーディングは、分析から切り離すことができる事務的な作業である	コーディングに従事する者が分析にも関わっている。さらに、チーム全体で解釈作業に関わる

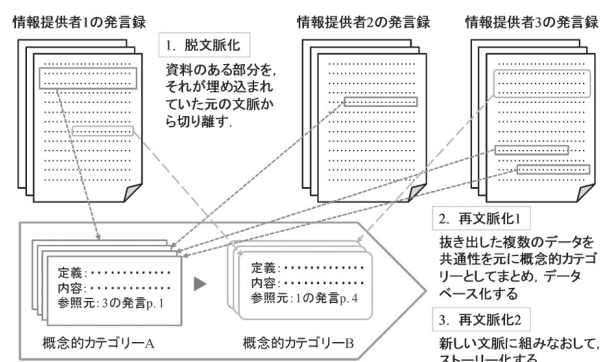


図6 脱文脈化と再文脈化（[21]を元に作成）

調査などを元にもって定められた概念的カテゴリ（e.g. 使いやすさ、エラー率）に当てはめられる。質問紙が作成されたり、実験が開始された後に新しく概念的カテゴリが追加されることはない。前もって用意した概念を作り直すとなると、それは複数のコードを縮約する場合である。基準と手順を定めて行われるので、作業は事務的にできる。

定性的コーディングの場合は、分析を通じて概念的カテゴリ、つまり「理論の言葉」を生成するために、調査中に何度も繰り返し見直される。発言や観察記録といった元データはコピーあるいはポインタとして保持されるので、いつでも元データを参照できる。繰り返される分析の中で、新たな概念的カテゴリや生成した概念的カテゴリの下位概念が追加される。共通の意味が見出された概念的カテゴリは統合される。分析と同時に並行で行われるため、完全に事務的な作業とはならない。チーム全体で解釈を見直したり、基準をすり合わせたりすることも重要な点である。

^{*4} 研究の調査対象者のことを、面接では情報提供者（informant）と言う場合が多い。観察の場合は、観察対象者と呼ぶ。本稿では、Flick^[3]にない、混乱を避けるために研究参加者で統一することにする。

定性的コーディングにおける大まかな手順を示したのが図6である。まず、収集したデータの書き起こしを行う。続いて、書き起こし文(transcription)を読みながら、分析の単位^{*5}を定めて資料から切り出し個別にまとめていく。この作業を脱文脈化と言う^[21]。先に述べた通り、共通の意味を持つ資料をまとまりとして概念的カテゴリーに整理する。この過程を第1段階の再文脈化、あるいはデータベース化と呼ぶ^[21]。最後に、生成した概念的カテゴリーを組み直して、これらの関係を説明できる理論あるいはモデルを提案する。これを第2段階の再文脈化、またはストーリー化と言う^[21]。

4.3 サンプルング

標本を抽出することをサンプルングという。サンプルングには、確率標本抽出法(probability sampling、または無作為抽出法: random sampling)と非確率標本抽出法(nonprobability sampling)がある。本稿では、実験と質問紙法で主に扱われる非確率標本抽出法のみ説明する。確率標本抽出法については、第3回を参照されたい。

非確率標本抽出法は、実施者が目的に、あるいは現場の状況に応じて定めた基準に基づき選択される抽出法である。Pattonによると、16種類に分類される^[13]。事例研究の欄で紹介したものでは、極端、あるいは逸脱した事例(extreme or deciant case sampling)や典型事例(typical case sampling)、決定的な事例(critical case sampling)、偶然、あるいは創発的事例(opportunistic or emergent sampling ≡ revelatory case)がオーバーラップする。

HI研究で一般に使われている手法は、スノーボールサンプルング(snowball sampling)、便宜抽出法(convenience sampling)、理論的サンプルング(theoretical sampling)である。スノーボールサンプルングは、最初に選んだ調査対象者から次の対象者を紹介してもらい、次の対象者からさらに次の、という形で文字通り雪だるま式に標本を選ぶ方法である^[8, 9, 34]。連鎖式サンプルング(chain sampling)と同じ分類にされることもある^[13]。便宜抽出法は、時間や場所の都合から、実施者にとって手近な人々から抽出する方法である。もちろん、調査結果に対する信頼性は他のサンプルング手法より低くなる^[8, 9, 34]。ただし、このような手法であっても、標本には調査に関わる共通項が無ければならない。

定性的調査の中で、最も一般的で体系だったやり方が理論的サンプルングである。グランデッドセオリーを提案したGlaserとStrauss^[6]が、提案時に考案した。表3に、理論的サンプルングと統計的サンプルングの違いについて示した。探索的に研究を行う場合、定量調査と異なり、事前に人びとがどのような特性を有しているのか、またどれくらいの規模で存在しているのかがはっきりしない。

例えば、認知症介護の現場で、情報機器がどのように影響を与えるかを調べたいとしよう。お年寄りは、それぞれ異なった人生とその過程で培った経験・人格をお持ちである。また、認知症の原因疾患は非常に多様であることに加え、徘徊のような介護職員が気をつけなくてはならない事象は、いつでも同じ人が同じように生じさせるとは限らない。介護職員の経験や技術や年齢もまちまちである。仮に、法的な定義などに沿って各人を基礎的な母集団として分類した

表3 理論的サンプルングと統計的サンプルングの違い^[3]

理論的サンプルング	統計的サンプルング
基礎的な母集団の範囲が事前に分らない	基礎的な母集団の範囲が事前に分かる
基礎的な母集団の特性が事前に分らない	基礎的な母集団の特徴の分布が予測できる
段階的に基準を定義してサンプルング要素を複数回にわたって引き出す	事前に定義した計画に沿ってサンプルを一度に引き出す
サンプル数は事前に決まっていない	サンプル数は事前に決まっている
サンプルングは理論的飽和に至った時に終わる	サンプルングは全てのサンプルが調べられた時に終わる

としても、それだけでは「現場の言葉」を零さず捉えることができない場合が多い。さらに、現実的には、基礎的な母集団を代表できるだけの標本数が無いということもしばしばである。

理論的サンプルングでは、このような課題を乗り越えるために、データのコーディングと分析を通して作られる「理論の言葉」とデータ自身の絶えざる比較の中から、段階的に調査対象者や収集するべきデータを定めていく^[3, 9, 21, 31]。このとき、収集するデータは、必ずしも同一の性質のものばかりではない。別の状況における考え・行動や、同一の場面に対する別の人の考え・行動を対象として、追加的に収集することもある。結果に肯定的なデータばかりを集めるのではなく、生成している理論やモデルが妥当であるかを考慮する素材として、理論やモデルに反する証言や観察データが無いかどうかにも注意を払う^[29, 31]。サンプルングは、データより生成した各概念間のつながりを説明できる理論が完成し、データを見直してももはや新たな概念やつながりが浮かび上がらなくなったときに終了する。この状態を理論的飽和(theoretical satulation)という^[3, 31]。木下は、調査全体の理論的飽和を判断するのは容易ではないため、理論やモデルを成す概念とそのつながりについての理論的飽和を検討するのが良いと述べた^[31]。

いずれのサンプルングにおいても、初学者は、計画時に何人の研究参加者に面接をすれば、あるいは何回同じ場面を見れば十分妥当なのか、という疑問にとらわれるであろう。しかし、数に頼った基準を適用とする姿勢そのものが、統計的サンプルングの考えから脱しきれていないと考えるべきである。サンプルングは、リサーチクエスションと研究対象を照らしてみ、十分にカバーできる範囲をベースにし、データの豊かさや深さ、得られた理論ないしはモデルとの関係の中から判断されるべきであるとされる^[9, 29, 31]。

4.4 トライアングレーション

定性的研究の成果における妥当性と信頼性を高めるために、図7に示したような様々な方法、調査対象者、場所、理論、実施者を戦略的に組み合わせることでデータを収集したり分析したりする考え方をトライアングレーション(三角測量的方法、方法論的複眼、triangulation)と呼ぶ^[3, 20]。

これまでに述べてきた通り、あらゆる方法には長所とその

^{*5} どのくらいの粒度でデータから切り出すかは手法によって異なるが、本稿では詳細について触れない。

裏返しとなる短所がある。そのため、単独手法により収集したデータのみで結論づけるより、複数のアプローチを用いるほうが研究上の弱点をカバーし、主張を支持できるデータやエビデンスが提示しやすくなる。複数の方法を組み合わせ、裏づけをとることという説明がわかりやすい^[20]。

この考えは、定性的研究を行う際に有効であるが、あらゆる研究で実施する必要はない。Flick は、研究対象に複数の方法論的アプローチが必要か?、複数の理論的視点をもって研究に臨んでいるか?、研究期間や資源（資金など）にはトライアングレーションを実施する余裕があるか?、調査対象となる人びとに無理な負担を強いることがないか?などを精査し、必要性や得られる効果について考えた上で実施するかどうかを決めるべきであるとした^[3]。佐藤は、単なる折衷的なやり方では、複数の調査法を併用する意味が無いと述べた。データのごく一部だけをつまみ食いしてまとめられた、おどろきな研究報告書になるから^[20]である。調査・目的対象とリサーチクエスチョンと、各手法の強み・弱みを十分吟味し、妥当な方法を戦略的に選択することが重要である。

4.5 ラポールの形成

通常の人間関係を想像すれば当たり前のことであるが、信頼関係を築けていない人間に本音を語ることは少ない。また、仲が良すぎる状態になってしまえば、情が判断を狂わせることもある。このような、信頼関係のことを、定性的調査ではラポール（rapport）という。信頼性の高い情報を得るためには、研究参加者と相互に信頼しあえる関係を築いておかななくてはならない。

ラポール形成のために取るべき行動に唯一解はないが、教えていただく基本姿勢が大切となる^[25]。研究参加者に調査に関する諸条件をきちんと伝えておくこと、権利は守ること、礼儀正しく親しみやすい印象を与えることなども大切なことである^[34]。

5. 面接法の概略

面接法には、直接観察することが難しい事柄（思考や過去の出来事など）についての資料収集を目的とした調査的面接法と、治療や診療を目的とした相談的面接法（臨床的面接法）がある^[30]。本稿では、調査的面接法のみ説明をするため、この手法を単に面接法と表記する。

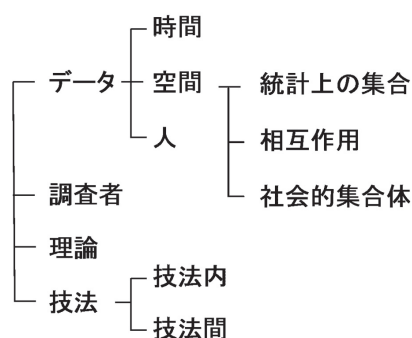


図7 トライアングレーションの対象^[20]

5.1 面接法の長所・短所

調査対象者から、直接観測しにくい事柄に対し言語を介してデータ収集するという意味では、面接法と質問紙法には大きな違いはない。大きく異なる点は、インタラクティブ性である。質問時に不明確な点があればその場で確認でき、質問紙よりも会話のやり取りを通して深く尋ねることが可能で、表情や無意識の動作といったノンバーバル情報も観察・記録でき^[18]、様子を見て質問を追加したり削除したりする判断ができる^[34]。直接、あるいは電話等で実施するため本人を確認しやすい点や、回収率が高い点、他の手法と組み合わせやすい点も大きな長所である^[34]。

その反面、面接者と研究参加者が少数で相対して行う方法であるので、質問紙法より少人数のデータしか集められない。統制も難しく、分析時に主観が入り込みやすい^[18]。

良くも悪くも面接者の存在と個性が結果に反映されやすい点も、質問紙法と異なる^[9, 34]。

5.2 面接法の分類

構造化の程度による分類

質問が事前にどの程度構造化されるかによって分類される。分類は、質問紙法と同等程度に構造化・標準化された構造化面接法（structured interview）、構造化しきものをほとんど有しない会話的な非構造化面接法（unstructured interview、非形式的面接法；informal interview）、両者の中間的な半構造化面接法（semi-structured interview）の3種類となる^[9, 34]。

構造化面接法は、対面かつ口頭で行う質問紙法とも言える。質問紙法と同様に、質問内容と言い回し（wording）、質問順は厳密に守られ、回答は選択式（close-ended）となる。会話的なやり取りは余分なものとして排除されることが望ましい。面接者の違いによる影響を最小限に抑えるためである。面接者にも研究参加者にも自由度が低い手法である一方で、信頼性の向上は期待できる。仮説検証型研究を実施する際に採用される^[34]。

非構造化面接法は、聞き取り調査とも呼ばれ、フィールドワークや市場調査に必ずといって良いほど用いられる。質問順や言い回しについて厳密に定めて実施され、研究参加者も回答方式を制限されない自由な（open-ended）やり取りとなる^[34]。問わず語りのようなやり取りもこの分類に含むことがある^[20]。面接中の質問は、研究参加者の発言に応じて、前もって準備しておいたものを取りやめたり、新たに思いついたものをぶつけたりする。ここで初学者に注意を促したいのは、準備は必須ということである。面接時のやり取りが自由形式なだけであって、調査前には関連資料を読み込んでおかななくてはならない。リサーチクエスチョンと質問の内容も大まかには決めておくべきである。調べようとしていたことを、会話の最中に再構成する手法であるため、実施者には十分な技量が求められる。また、面接の時間が十分に取れない場合には、必要十分な情報を得られないまま終了することになる。この手法は仮説生成型研究によく用いられる。

半構造化面接法は、両者の中間的な性格を有するもので、最も一般的に利用される^[9, 34]。構造化面接法と同じく事前に質問内容は決めておくが、その数は少なめにしておく。

キーと判断できる発言が出た場合に関連する質問をし、会話の内容を深く掘り下げていく。発言の意図を確認したり、面接中に湧いてきた疑問について問うたりできる。質問順も変えて良い^[34]。ただし、ある特定の人物だけに質問を加えるのは、信頼性の観点から望ましくない。湧いてきた疑問が重要と判断できた場合は、他の研究参加者にも同様の質問をすべきであるし、すでに面接が終了した研究参加者にも追跡調査を実施する必要がある。

HI 研究において、実際には完全に構造化した面接を行うことも、完全なる非構造化面接法を採用することも考えにくい。時間と手間と資金の面から不合理だからである。また、半構造化面接法だけが実施されることもないであろう。面接中に雑談、つまり非構造的な会話は必ず混入するし、それをなくして研究参加者との信頼関係を築くことは困難だからである。要するに、現実の面接法は、構造と非構造の間を行き来しながら調査が進むと理解して良い。

研究参加者の参加形態による分類

1. 個人面接法 最も一般的な方法は、面接者 1 名、研究参加者 1 名で行うものである。研究参加者に警戒心を抱かれにくいので、本音を聞き出しやすい^[34]。HI 研究で実施されるのは面接を主体にした研究と、実験後に実施される（しばしば簡潔な）面接を実施するものがある。採用されることが多いのは、先述した半構造化面接法である。調査対象の特定の面に焦点を当てて詳しく調べる焦点化面接法（focused interview）や研究参加者の根底にあり、かつ質問紙法では調べることが難しい、動機や信念などを調べる個人深層面接法（depth interview）が行われることもある。いずれの方法も、面接者には力量が必要とされる^[8, 34]。フィールドと何らかの関わりを持ちつつ行う参与観察の中で、観察対象者が取っている行動の意味や用いている道具が何かわからないときなどに打ち解けた会話形式で実施されるエスノグラフィックインタビュー^[3]もここに含めることができる。

1 名の研究参加者に対し、面接者 2 名で調査に臨む場合もある。片方の面接者が質問に集中し、もう一方の面接者がメモを取る役に徹するためである。役割が明確化されることと、余裕ができるのが最大のメリットである。聞き落としがなくなる、メモが豊富になるなどの効果がある。一方で、研究参加者にとって 2 名と相対するのはプレッシャーになるので、打ち解けるのが難しくなるデメリットもある^[34]。

2. ジョイントインタビュー 同一のテーマに対して同時に研究参加者が 2 名参加する形態を、ジョイントインタビュー（joint interview）と呼ぶ。この組み合わせには、ペアである必然性が求められる。例えば、友人、恋人、親子のような近い関係、あるいは同一実験にペアで参加した参加者などのような組み合わせである。

両者のやり取りからお互いの関係性を観察することができたり、両者が回答を補完しあうことにより事実関係の曖昧さが提言できたりする利点がある^[34]。しかし、両者の関係性が対等でない場合などに発言内容に偏りが生じる^[34]。

3. 集団面接法 集団面接法（group interview）は、研究参加者が 3 名以上参加する面接法である。他の研究参加者の発言を参考にできるので、参加者同士で考えを深めながら進められる点が大きな利点である。面接者は、単なる質問者としての技術に加えて、会議の司会進行役（facilitator、moderator）としての技量も求められる。非構造化され、参加者同士での批判を禁じた形式のブレインストーミング（brainstorming）がここに含められることもある^[34]が、一般的なものはフォーカスグループ（focus group、group discussion）である。

フォーカスグループは、Merton と Kendall により発表された論文^[11]を元に、Merton 本人を始め、多くの研究者により発展させてきた。多様な定義があるが、Vaughn によると以下の様な中核的な特性を有するとされる^[15]。

- ・ ある特定の話題に何らかの見解を示すことを求められたグループにより構成される。
- ・ 形式張らない場である。
- ・ 通常、6 名から 12 名からなる同質性を有したグループで構成される*⁶。
- ・ よく訓練された司会者が、準備された仮説と質問に基づいて参加者の反応を引き出す。
- ・ 引き出す反応は、特定の話題に対する理解、感情、受け止め方、考えなどである。
- ・ 定量的調査のように、結果の母集団への一般化を目指すものではない。

フォーカスグループの長所は、誰かの発言を引き金に別の参加者が発言したり、アイデアが広がったり、同じ意見を有する参加者の存在に安心して発言をしたりといった、参加者同士のインタラクションからもたらされる回答の質の向上である。この反面、発言が重なりあうなどインタラクションにより発生する問題も生じ、コーディング時やデータ分析時に労力がかかる。また、司会者は特定の参加者に発言が偏らないように、また参加者同士が気兼ねなく会話できるように、面接を進行しなくてはならないため、技量が必要とされる^[8, 15]。

5.3 準備

面接を実施する前には、リサーチクエスションを立て、これに照らしてどのような人々を対象とするかを決定する。この順番が逆になることもある。可能であれば何人に実施するかを決めておくと、謝金や実施時間のめどが立つ。この段階で倫理審査が必要とされる場合がある。

上記の項目を明らかにした後に、口頭、電話あるいは書面にて依頼を行う。初対面の場合は、自己紹介をした上で、コンタクトをとるに至った経緯を説明しなくてはならない。依頼内容には、実施者（実施機関）の名称および連絡先、調査目的と意義、対象者が選定された理由、プライバシー

*⁶ 文献により適切な参加人数が異なる。Malhotra によれば 8 名から 12 名の間が最適とされ^[8]、鈴木は 10 名前後とした^[34]。

守秘の方法、記録方法（筆記、録音、録画）の許可のお願い、謝金の有無、公開方法、面接に要する時間が含まれている必要がある^[8, 32, 34]。また、依頼状とは別に、面接承諾書（同意書）を用意しておき、対象者が承諾した内容に対して書面に自署で署名（可能であれば押印も）していただく。

記録機器を用いる場合は、事前に使い方を習熟しておく必要がある。電池やバッテリー、延長コードなど周辺備品も複数予備を携行する。

5.4 実施中・実施直後に行うこと

面接は、「よい聞き手」であることが重要とされる。ただし、日常生活内の会話とは異なるために受動的では決して「よい聞き手」とは言えない。「よい聞き手」になることは、「よい質問」をすることから始まる^[32]。面接とは、他者の物の見方に分け入って行くこと^[9]でもある。研究参加者の思考や感情、意図、あるいは過去の出来事が自然と引き出されるのが良い質問であろう。漠然と「～についてどう思いますか？」と問うても、研究参加者も漠然とした回答か、一般論を返してくる。自然と引き出すためには、研究参加者が馴染んだ文脈に置くと良い（e.g. 「あなたは〇〇さんの介護をするときにはどのようなことを心がけていますか？」）。

Merriam は質問のタイプとして、仮説的質問、反対の立場からの質問、理想的な立場からの質問、解釈的な質問の4種類を挙げた^[9]。仮説的質問とは、ある特定の状況下において研究参加者が取りうる行動などについて「仮に」「例えば」で始める質問である。研究参加者が、特定の場面に固執して離れない場合や回答をしたがらない場合、あえて反対の立場に語ってもらったり、理想的な立場に立ってもらったりすることで、目先を変えることに繋がる。研究参加者の発言を一旦面接者が解釈し、それに対する反応を求めること（解釈的な質問）も有用である。Newman と Lamming は、例外的な質問を取り上げることと事前に調査対象について十分知識を持つことが有効であるとした^[12]。

とはいえ、「よい質問」とは何かを具体化して説明することは難しい。質問の良し悪しは会話の前後関係によっても、面接者と研究参加者の関係によっても変容するからである。そこで本稿では、「よくない質問」を列挙する。それは、ダブルバレル質問、誘導質問、「はいーいいえ」的質問である^[9, 32]。前者の2つは質問紙法で述べた理由と同じである。面接ならではの誘導もある。面接者の知りたい思いが前面に出すぎて、「こういう意味ですよね」のように確認を促すような質問が繰り返される場合である。研究参加者は調査トピックについてそれほど深く考えたことがない場合が多く、回答が誘導されるからである。「はいーいいえ」的質問はそれが単独で行われる場合にはそれほど問題視されないが、この質問が繰り返されるのであれば面接の利点を台無しにしてしまう。第1回で述べた通り、「はいーいいえ」で分かるのは皮相的な事柄に限られるからである。プライバシーを過度に抵触する質問も、もちろん「よくない」^[34]。研究参加者の発言を途中で遮ること、研究参加者と議論することも「よくない」面接となる^[32]。面接者の発言が、研究参加者よりと同じくらいであったり、長かったりする場合も「よくない」面接である。

許可された場合、面接の最中にはノートにメモを取るこ

とが重要である。その際、発言は忠実に記録する。単に発言をまとめるだけではなく、表情や傾き、沈黙などのノンバーバル情報も併せて記録しておくことが望ましい^[34]。解釈の際に重要な情報となるからである。

面接が終われば、研究参加者にお礼を述べる。そして、すぐに書き起こし文の作成に移る。録音していた場合は、きちんと取れていたかどうかを確認し、取れていなければ記憶の鮮明な内に文章化する^[34]。

6. 観察法の概略

6.1 観察法の長所・短所

質問紙法の他の手法より優位なのは、言語によらないデータを豊富に獲得できる点である。質問紙法や面接法では、社会的に望ましい態度などの影響により本音ではない回答が返ってくる可能性が排除できないが、特に長期的な行動ではごまかし続けることは難しい。また、研究参加者の言語能力に依存することなくデータが収集できること、普段言語化しない無意識的な行動を目の当たりにできることも大きな長所である。言語を上手く扱えない乳幼児や、障害者であっても調べることができる^[8, 18]。研究参加者への拘束が少ない点も長所である^[28]。

反面、観察者の存在が、研究参加者の行動に直接影響する可能性があること、観察者の先入観や技量がデータの精度や量に響くこと、対象となる事柄が生じるまで待たなければならないために他の手法と比べて時間と費用がかかることという欠点がある。観察単独での実施であれば、外見的情報以外のデータが得にくい。研究対象者が取った行動の裏にある理由、すなわち動機、信念、選好などはほとんど分からない^[8, 18, 28]。もちろん、多くの調査では、その場での非構造的な質問（e.g. 「これは何ですか？」「今何をやってらっしゃるのですか」）を行う^[3]ことでこの弱点をカバーする。研究対象者自身に、行為と同時にその理由を発話させて（同時発話説明、concurrent verbal protocol）、肉眼あるいはビデオなど機械により観察する手法もある^[12]。

6.2 観察法の分類

観察法は、様々な形態に分類可能であるが、本稿では代表的な参与の度合いと構成の度合い、人為性の度合い、直接性の度合いについて説明する。

参与観察・非参与観察

参与観察（参加観察、participant observation、participatory observation）はその名が示す通り、観察者が対象となる場に参与、つまりその中の一員として何らかの役割を果たしながら、多角的かつ長期にわたり観察する密着型取材法のことである^[20, 28, 36]。面接や観察だけではなく文書や記録の分析や内省も含まれる^[3, 20]。非参与観察とは、この逆で単なる観察者として現地に赴くタイプの手法である^[3, 20, 36]。二分的な分類よりは、以下に示す4種類の観察者としての立ち位置が有名である^[3, 7]。

- ・ 完全な参加者（complete observer）
- ・ 観察者としての参加者（observer-as-participant）
- ・ 参加者としての観察者（participant-as-observer）

・完全な観察者 (complete participant)

以下の、佐藤^[20]の説明が理解しやすい。完全な参加者は、対象となる場の成員が主たるものであり、研究参加者には目的が知らされず、観察されている事実も知らないというものである。観察者としての参加者とは、研究参加者に観察されることは知られている。現場には、一度きりの面接のために訪問するなどのように現場で果たす役割は少ない、いわば観察者としての役割が強い状態である。観察者が準メンバーとして現場に受け入れられ、より現場での役割が強くなるのが、参加者としての観察者である。完全な参加者は、マジックミラーのある部屋で一方向的に観察するように、研究参加者とは社会的な接触を一切持たない立場を維持する。

参与観察では、まず観察者が徐々に研究参加者に受け入れられて役割や身の置所を見つけていく、すなわち参加者に立場をシフトしていき、その過程で現場や個人へのアクセスが開ける（フィールドエントリー）。この過程を経て、リサーチクエストが明確化すると共に観察の焦点も絞られていく。最終段階では、焦点化された観察ポイントをリサーチクエストに照らしながら、密な記述のために証拠や事例集めが行われる^[3]。

構成的観察・非構成的観察

2つ目は、構成の度合いである。この分類は、これまでに質問紙法や面接法で述べてきた構成（構造化）と同じ考え方である。観察者が、事前に観察対象の行動・イベントや測定方法について事前に明確に定め、その方法に沿って実施するのが、構成的観察である^[8, 28, 36]。構成的観察の代表は、時間見本法と事象見本法である。

時間見本法（time sampling method）は、単位時間間隔あたりの行動について、行動の有無や流れ、頻度を観察する手法である。単位時間間隔は、仮説あるいはリサーチクエストに応じて決定され、数分単位から1/30秒まで考えうる。1/30秒のように間隔が細かい場合は、ビデオなどの撮影機器を用いる^[28, 36]。事象見本法（event sampling method）は、特定の行動の過程を観察するために採用される^[28]。対象となる行動が、どのように生起し、どのような変化を経て終わるのかを明らかにしようとするものである^[36]。

一方、非構成的観察では、観察者が対象に関係あると判断したあらゆる事柄を観察する。対象とする問題が明確かつ系統的に捉えられていない場合に、それらを探索的に明らかにするために採用される^[8, 28]。

自然的観察・実験的観察

人びとが営む日常世界の中で自然に生じる事象を観察するのか、人為的な環境下で研究参加者に何らかの統制をした上で観察するのかも事前に考えておく必要がある^[8]。人為的な環境とは、必ずしも実験室で実施されるものばかりを指すわけではない。特定のタスクを実施する場面、例えば料理や買い物といった行為について調べるために、用意された特定の場所に参加者を集めて観察する場合もある。一方の自然的観察であれば、研究参加者が街なかに出て買い物したり、自宅で料理したりする様を観察する。

直接観察・間接観察

これは、研究参加者が行為を行なっているその場で肉眼により観察するか、何らかの観察装置を用いて研究参加者から離れた場所で観察するかの区分である^[8, 36]。前者を直接観察（direct observation）、後者（indirect observation）を間接観察と言う^[36]。間接観察のことを機械観察（mechanical observation）と呼ぶこともある^[8]。

6.3 準備

観察法で行わなければならない準備は、面接法の場合と大差はない。リサーチクエストを立て、必要があれば倫理審査を受け、依頼をする。観察に赴く調査場所や研究参加者をどのように選ぶかは、面接と同じかそれ以上に重要になる。観察法は、面接法より時間と費用がかかる手法であるので、やり直しににくいからである。小田は、現場に入るコツとして、Webによる事前調査などによりアクセスしやすいところを手がかりにすること、知り合いの伝手を頼ること、アルバイトやインターン、ボランティアなどによりその現場の一員となることを挙げている。また、縁に導かれることも重要と述べている^[25]、用意するものとしては、文房具（筆記用具、メモ帳、ノート）、名刺、機能的な服、撮影・録音機材、おみやげがあるとしている^[25]。

構成的な観察を実施するのであれば、生起した行動やイベントを記録できる観察記録用紙を準備しておかなくてはならない。観察記録用紙には、（時間見本法であれば単位時間内に）生起した行動に印を付けるチェックリストや、時刻、対象者名、行動内容、状況といった項目を記録欄として用意し、時間的な流れに沿って自由記述で記録するものがある^[19, 27, 36]。

6.4 実施中・実施直後に行うこと

構成的な観察の場合は、準備した用紙に沿って記述していく。その際、備考欄や欄外に気づきや分析的な記述を書き込んでも良い。

非構成的な観察の典型として、ここでは、主として参与観察の手法を紹介する。観察が始まると、リサーチクエストに関連するあらゆる情報を記録する。初期段階では、リサーチクエストが明確でない場合が多いので、その場合はポイントを広げて零さず拾い集める努力が必要となる。観察すべき要素は、

- ・ 物理的環境（人工物、音環境、空間配置、場所、気温など）
- ・ 参加者（人数、各人の属性、その場にいるべきでない人物、各人の役割、参加理由など）
- ・ 活動と相互作用（人びとが行うつながりのある一組の行為、活動や相互作用を生み出しているルール、人びとが達成を試みる目標、活動の開始時間、終了時間、典型的な活動か、非日常的なものか、時間を通じて生じる経過など）
- ・ 会話（言語情報、意味を付与するような沈黙や非言語情報など）
- ・ 表出される情動
- ・ 自分自身の行動
- ・ それ以外の気になったこと

である^[3,9]。これらの他に、自分の感じたことや分析的な記述は別欄に OC (observation comment) として同時進行的にメモを取る^[2,9]。観察開始時(フィールドエントリーの最中)には、観察者と研究参加者(現場)との間にギャップがあり、それを知ることで「カルチャーショック」を感じるようになる。これが、観察者が抱いていた思い込みを打ち破るきっかけとなる。同時に、現場に対するローカルな知識を持たないが故に素朴な質問をすることができる。これにより、研究参加者が気づいていない「当たり前」をお互いに捉え直すことができる^[20,28]。参与観察では、観察者が見ていて分からない場面に立ち会った際に、非構成的な質問を研究参加者にすることが重要である。また、観察する際には、耳に入ってくる情報もできるだけメモとして残すことが重要である。

手続きは、おおむね以下のようなプロセスになる^[3]。

- a. 研究上関心を引くプロセスや人物をどこで観察するかを決定
- b. 観察の際に必ず記録されるべき事項は何かを定義
- c. 観察の焦点を観察者間で統一するためのトレーニングを実施
- d. 最初にフィールド全体を把握するための描写的観察を実施
- e. 研究設問に関する側面に次第に集中していく焦点的観察への移行
- f. 中心的な側面だけに的を絞る選択的観察への移行
- g. 理論的飽和に達することによる、すなわち観察を続けても新しい知見は出てこないと思われる段階での観察の終了

観察者が調査地で見聞きしたことを書き留めたメモや記録(の集積)のことを、フィールドノーツと言う^[20]。このフィールドノーツを元にして、最終的な報告書を書き上げていく。この際、4.1で挙げたような雑な記述にならないよう、現場の言葉と理論の言葉を何度となく往復することが欠かせない。

7. 面接法・観察法において注意すべきこと

面接法および観察法で注意すべき点は、重なりが多いのでまとめて説明する。なお、本稿では、国内での調査・評価を対象としているので、調査実施時の大きな課題の1つである、文化的背景の違いから発生する諸問題については触れないことにする。

1. バイアスの避け難さ これまでも何度か触れてきたように、定性的調査では自らを道具として活用することが重要である。面接においても観察においても当然同様である。しかし、これは裏を返せば、調査実施者が持つ性格や経歴や職階、調査実施場所がデータに影響することを避けられない。例えば、職場で面接する場合には、職場に起因する問題について答えにくいだろう。木村は、価値観や信条が重視されるテーマや社会問題を扱うような研究では、このようなことに特に注意が必要であると指摘した^[32]。データ収集時にバイアスが混入することを避けられないので、論文などを執筆する際

には調査状況や対象について可能な限り詳しく説明することが求められる。

2. 研究参加者の権利を守ること 面接および観察では研究参加者との距離が非常に近くなるため、研究には直接必要のない情報も含めて、調査中には多くの情報が集まる。できるだけ安心していただける環境を用意するために、調査実施者とその関係者は研究参加者の権利を守る努力をしなければならない。鈴木は、以下の点を権利を守るためのガイドラインとした^[34]。以下の内容は面接についてのものであるが、観察時にも同様の項目が多く見られる。

- a. インフォームドコンセントのために面接者が責任を負う情報提供と説明

5.3で説明した通り、面接の目的や実施条件、公開方法などを研究参加者に漏らさず説明する必要がある。

- b. プライバシーと個人情報を保護するための方法

面接内で知り得た内容は、必要最小限の調査関係者にのみ共有する。研究参加者が所属組織について話した内容は、匿名性を保証し、秘密として守られなくてはならない。公表時にも、本人が特定されることがないように配慮しなくてはならない。収集したデータは、安全なところに保管し、外部に流出しないように注意を払うことが必要である。研究参加者の人権、人格、名誉、自己イメージを傷つけることがあってはならない。

- c. 研究参加者の権利

プライバシーと個人情報以外にも、研究参加者が有する権利がある。研究参加者は、いつでも面接への協力を拒否する権利がある。研究参加者が望めば、面接者とその関係者は収集したデータの一切をすぐに破棄しなければならない(自己情報コントロール権)。また、面接者とその関係者は、いつでも情報開示請求に応じなければならない(自己情報開示請求権)。研究参加者から要望があれば、面接者に調査結果を報告する義務を持つ。同様に、要請を受ければ、収集したデータおよびそれらの書き起こし文、分析結果などから、当該研究参加者に関する記述を見せなくてはならない。

- d. 子どもや高齢者などを対象とした調査

研究参加者が小学生以下の場合には、個別調査なら親に、学校単位の調査なら学校あるいは学校を通して親に、インフォームドコンセントを実施する必要がある。また、親が承諾した場合でも、当の対象者である子どもが同意しなければ協力させてはならない。対象者が高齢者、障害者、重病者の場合は、本人と本人の代理を務められる立場の人間(親族、施設責任者、医師など)から同意を得なくてはならない。

3. 紙幅の制限 4.1において、雑な記述の典型例としてご都合主義的引用型があると述べた。この原因の1つとして、学会の予稿集や論文誌のページ制限により、必要十分な記述が行えないということがある。日英米を問わず、ページ数はおおむね6から多くても10ページというところである。ページ数が多くても、1ページあたりに収まる文字数は少ないこともあり、重要な発言であっ

でも引用することが難しいことはしばしばある。定性的研究の論文をまとめる際に、常にこの問題と向き合っていないとてはならない^{*7}。

4. 研究参加者への還元 先方からの要望に応える形で調査を実施する場合を除いて、一般的に研究参加者にとって誰かの研究に協力することは、時間と手間を搾取されることに等しい。調査への協力に対して謝金を支払うこともあるが、大学から支払える金額は微々たるものである。ほとんどの場合対価として十分とはいえないだろう。先方が望めば、必ず調査結果を還元する必要がある。調査終了時に、丁寧にお礼を述べた上で、平易な言葉を用いて結果を説明する。途中段階のものではなく、最終的に審査を通過したバージョンを送るべきであろう。学生から金品を贈るのは不適切な場合もある^[25]ので、指導教員と協議して決定することが望ましい。

8. おわりに

本稿では、リサーチデザインの最終回として、定性的調査を説明した。紙幅の都合で、かなりの部分が割愛された。読者は、事例研究、エスノグラフィ、グランデッドセオリーについては、手順を含めて説明して欲しいであろうし、エスノメソドロロジーやアクションリサーチなど他の考え方についても知りたいであろう。また、分析の具体的例を知りたくなると予想される。これらについては、本稿で引用した文献に当たっていただきたい。また、今後の会誌記事で連載されることを期待したい。

この記事を書くのが自分で良いのかと、ずっと煩悶しながら連載を続けていた。私は、いくつかの調査系論文を発表しているが、失敗続きであった。連載記事中に書いてあることの多くを、調査実施中は実行できていなかった。躓き、転び、共同研究者や査読者に迷惑をかけながら体得してきた。この連載記事は、私の失敗録の裏返しとしての記録である。記事を書くのにもっと相応しい人が居るのではないと思うが、自分がしてきた失敗を後進の人がひとつでもしないのであればと願い、キーボードを叩き続けた。この連載記事が、読者の皆さんにとって少しでも理解の足しになればと願ってやまない。また、興味を持ってくださった人は、この記事に満足すること無くどうか原典を読んでもらいたい。そして、私の失敗を繰り返すこと無く、私の屍を超え、新しく意義のある研究成果を世界に向けて発信していただければ、この上ない幸せである。

謝辞

この原稿を執筆するに当たり、適切なコメントと助言をくださった北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科博士前期課程の金塚敦、横山啓太の各氏に心から感謝する。連載の機会をお与え下さった、京都大学の下田宏先生と黒田知宏先生にも謝意を表す。そして、私の調査を支えてくれた共同研究者たち、そして何より研究に協力して下さった参加者の皆様に心から感謝を申し上げる。

参考文献

- [1] Easterby-Smith, M., Thorpe, R., Lowe, A.: Management Research: An Introduction, Sage Publications, 2002,

- (イースターバイ = スミス, M., ソープ, R. & ロウ, A. (木村達也, 宇田川元一, 佐渡島紗織, 松尾睦 訳) マネジメント・リサーチの方法, 白桃書房, 2009.)
- [2] Emerson, R., Fretz, R., Shaw, L.: Writing ethnographic eldnotes (2nd Ed.), University of Chicago Press, 1995.
- [3] Flick, U.: An Introduction to Qualitative Research (4th Edition), Sage Publications, 2011, (フリック, U. (小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子 訳) 新板 質的研究入門 – “人間の科学” のための方法論, 春秋社, 2011.)
- [4] Gargen, J.: An Invitation to Social Construction, Sage Publications, 1999, (ガーゲン, J. K. (東村知子 訳) あなたへの社会構成主義, ナカニシヤ出版, 2004.)
- [5] Geertz, C.: The Interpretation of Culture, Basic Books, 1973, (ギアツ, C. (吉田禎吾, 中牧弘允, 柳川啓一, 板橋作美 訳) 文化の解釈学 (I), 岩波書店, 1987.)
- [6] Glaser, B. G., Strauss, A. L.: Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research, Aldine De Gruyter, 1967, (グレイザー, B.G. & ストラウス, A. L. (後藤隆, 水野節夫, 大出春江 訳) データ対話型理論の発見 – 調査からいかに理論をうみだすか, 新曜社, 1996.)
- [7] Gold, R.: Roles in sociological field observations, Social Forces, 36, pp.217-223, 1957.
- [8] Malhotra, N. K.: Marketing Research: An Applied Orientation (4th Edition), Prentice-Hall, 2004, (マルホトラ, N. K. (小林和夫 監訳) マーケティング・リサーチの理論と実践理論編, 同友館, 2006.)
- [9] Merriam, S. B.: Qualitative Research and Case Study Applications in Education, Jossey-Bass, 1998, (メリアム, S. B. (堀薫夫, 久保真人, 成島美弥 訳) 質的調査法入門 – 教育における調査法とケース・スタディ, ミネルヴァ書房, 2004.)
- [10] Merriam, S. B., Simpson, E. L.: A Guide to Research for Educators and Trainers of Adults (2nd Edition), Krieger Publishing Compan, 2000, (メリアム, S.B. & シンプソン, E. L. (堀薫夫 監訳) 調査研究法ガイドブック – 教育における調査のデザインと実施・報告, ミネルヴァ書房, 2010.)
- [11] Merton, R., Kendall, P.: The focused interview, American Journal of Sociology, pp.541-557, 1946.
- [12] Newman, W., Lamming, M.: Interactive system design, Addison-Wesley New York, 1995.
- [13] Patton, M.: Qualitative research and evaluation methods, Sage Publications, Incorporated, 2002.
- [14] Richards, L.: Handling Qualitative Data: A Practical Guide, Sage Publications, 2005, (リチャーズ, L. (大谷順子, 大杉卓三 訳) 質的データの取り扱い, 北大路書房, 2009.)
- [15] Vaughn, S., Schumm, J., Sinagub, J.: Focus group

^{*7} HI 分野のトップ会議であり、定性的研究を積極的に受け入れている ACM の CSCW は、CSCW2013 においてページ制限はないが、査読時に appropriateness of length の評価を受ける。

interviews in education and psychology, Sage Publications, Incorporated, 1996, (ヴォーン, S., シューム, J. S., シナグブ, J. (井下理 (監訳), 田部井潤, 柴原宜幸 訳) グループ・インタビューの技法, 慶應義塾大学出版会, 1999.)

- [16] Ying, R.: Case Study Research: Design and Methods (4th Ed.), Sage Publications, 2008.
- [17] 塩瀬隆之: エスノメソドロロジーのススメ, ヒューマンインタフェース学会誌, Vol.8, No.4, pp.221-222, 2006.
- [18] 宮下一博: 第1章 質問紙作成の基礎, 心理学マニュアル質問紙法 (鎌原雅彦, 大野木裕明, 宮下一博, 中沢潤 (編)), 北大路書房, pp.1-8, 1998.
- [19] 原野明子: 2章 事象見本法の理論と技法, 心理学マニュアル観察法 (中沢潤, 南博文, 大野木裕明 (編)), 北大路書房, 1997.
- [20] 佐藤郁哉: フィールドワーク書を持って街へ出よう (増訂版), 新曜社, 2006.
- [21] 佐藤郁哉: 質的データ分析法-原理・方法・実践, 新曜社, 2008.
- [22] 山崎敬一, 川島理恵, 葛岡英明: エスノメソドロジ的研究をいかに行うか, ヒューマンインタフェース学会誌, Vol.8, No.4, pp.223-228, 2006.
- [23] 山崎晶子, 久野義徳: ハイブリッドサイエンスとしてのエスノメソドロロジー: ミュージアムガイドロボットの開発, ヒューマンインタフェース学会誌, Vol.8, No.4, pp.229-234, 2006.
- [24] 小池星多: エスノメソドロロジーと状況論的デザイン, ヒューマンインタフェース学会誌, Vol.8, No.4, pp.241-246, 2006.
- [25] 小田博志: エスノグラフィー入門, 春秋社, 2010.
- [26] 杉村和美: 事例研究, 質的心理学 (無藤隆, やまだようこ, 南博文, 麻生武, サトウタツヤ (編)), 新曜社, pp.169-174, 2004.
- [27] 中沢潤: 1章 時間見本法の理論と技法, 心理学マニュアル観察法 (中沢潤, 南博文, 大野木裕明 (編)), 北大路書房, pp.14-23, 1997.
- [28] 中沢潤: 序章 人間行動の理解と観察法, 心理学マニュアル観察法 (中沢潤, 南博文, 大野木裕明 (編)), 北大路書房, pp.1-12, 1997.
- [29] 能智正博: 理論的なサンプリング, 質的心理学 (無藤隆, やまだようこ, 南博文, 麻生武, サトウタツヤ (編)), 新曜社, pp.78-83, 2004.
- [30] 保坂亨: 第2章 質問紙法の実施方法, 心理学マニュアル面接法 (保坂亨, 大野木裕明, 中沢潤 (編)), 北大路書房, pp.1-8, 2000.
- [31] 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践-質的研究への誘い, 弘文堂, 2003.
- [32] 木村涼子: 11章 インタビュー法, 実践的研究のすすめ-人間科学のリアリティ (小泉潤二, 志水宏吉 (編)), 有斐閣, pp.198-210, 2007.
- [33] 鈴木栄幸: エスノメソドロロジーに基づく協同作業インタフェースのデザイナー-相互行為リソースとしての身体 of 再編成-, ヒューマンインタフェース学会誌, Vol.8, No.4, pp.235-240, 2006.

[34] 鈴木淳子: 調査的面接の技法 (第2版), ナカニシヤ出版, 2005.

[35] 戈木クレイグ・ヒル・滋子: グラウンデッド・セオリー・アプローチ-理論を生みだすまで, 新曜社.

[36] 澤田英三, 南博文: 第2章 質的調査-観察・面接・フィールドワーク, 心理学研究入門-調査・実験から実践まで (南風原朝和, 下山晴彦, 市川伸一 (編)), 東京大学出版会, pp.19-62, 2001.

著者紹介



杉原 太郎 (すぎはら たろう):

2000年徳山工業高等専門学校専攻科機械電気工学専攻修了、2005年京都工芸繊維大学工芸科学研究科博士後期課程修了、同年北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科助手、2008年同助教、現在に至る。博士 (工学)。ヒューマンインタフェース技術が現場のユーザやワークスペースにどのように影響するかについて興味を持つ。SSS2008情報教育シンポジウム論文賞、ヒューマンインタフェース学会第13回学術奨励賞受賞。